

# 承認をめぐる闘争としての水俣病運動

成 元哲

キーワード：承認をめぐる闘争、運動参加の動機づけ、水俣病運動

## 1. 彼らを駆り立てるモノは？

ここに「患者の心根をまなべ」というタイトルの文章がある。1969年6月、水俣病第一次訴訟を支援する目的で創刊された機関誌『水俣病裁判支援ニュース告発』（以下、『告発』）の創刊号に、当時、NHKプロデューサーであった松岡洋之助が寄せたものである。

人は虐げられ、抑圧されたギリギリの状況のなかでは、闘いに立ち上がる他はない。言葉をもてあそんだり、思想を論じたりしているうちは、まだ自らの問題にしていなのである。原水爆禁止運動が完全に破産したのも、被爆者の心の痛みを運動家が自分のものにできなかったからである。

水俣病患者が自らチッソ資本を相手どり闘いを挑んだ時、私は理屈をこねる前に、自らの闘争課題として受けとめ、患者の手足となって行動することを決意した。

大衆運動の方向とか意義を論じながら、これまで水俣病患者の闘いを自らの問題にすることが出来なかった既成の運動＝私自身をふくめた運動を否定することなしには、自らの闘いもありえないと考えたからだ。県民会議結成大会の際、患者の方が「あなたの方の支援のおかげで闘えます」と発言されるたびに、一体我々はこれまで何をしてきたのかと、キビシク自分に問いかけざるをえなかったのも、そういう理由からである。

だから、この運動を党派の利益や宣伝に便おうと考える者や、名声のために利用し

ようという者をきびしく弾劾する。そういう思想こそが、水俣病患者を見殺しにしてきたのだ。自ら闘う姿勢をとりえずに、組織のあり方とか、すすめ方を論じるものは、水俣病患者の戦闘性に教を乞うが良い。

思想や組織の何たるかを知るすべもない患者の人々が虐げられたその怒りをもって、巨大な資本に対決するその行動に学ぶのは既成の活動家ではないか。

その患者と連帯することは、患者の心根に、すべてを委ねる決意と行動だけである。

松岡洋之助は、水俣病患者の闘いを自分の問題として受けとめ、それに連帯することになった内面の変化を語っている。なぜ水俣病患者でもない松岡が、患者の心根を学べというのか。果たして患者は何を望み、何を要求しているのか。そして支援者は、水俣病事件をどのように捉え、そこに連帯する論理を見出したのか。社会的に貶められ虐げられるという、尊厳を剥奪された経験は、どのようにして主体を実践的な闘争に踏み込んでいく動機につながるのだろうか。人間に加えられた不正が、当事者の目に明らかになり、受苦の経験を能動的な行為に転換していく中間項はなにか。本稿では、なぜ人は社会運動に参加するのか、個々人の動機づけの基底にあるものを、社会関係における相互承認という観点から検討する。承認とは、むきあう二つの自己意識が、自分も相手も自由で自立した存在だと捉える心の動き、すなわち、人が人を人として認めることである<sup>①</sup>。したがって、社会運動は「承認をめぐる闘争」であるという考え方にもとづいて、水俣病運動をみていきたい。

水俣病運動は、一元化・平準化しつつあった大衆消費社会の規範秩序に対して、そこから取り残された大衆消費社会の「他者」による承認

をめぐる闘争である。1968年1月、新潟水俣病患者代表団の水俣市訪問を控え、水俣市民30余人が集まって「水俣病市民会議」（以下、「市民会議」）が結成された。この時点から水俣病第一次訴訟が一段落する1973年7月までの運動を、ここでは水俣病運動として捉えている。この運動は、「近代」を根本から批判し、可能な限り最も近代的ならざる一つの反対典型を指し示そうとした、「近代的」な運動である。この運動が「近代的」であるという規定は、人間の尊厳への執拗なこだわりと、「個」に基づくネットワーク型の運動組織から由来する。水俣病運動は、近代批判や近代化への反省が本格化した時代状況のなかで、「反近代的」な心情倫理（患者がやりたいのは仇討ちであり、われわれは義をもって助太刀致す）に訴えることによって、近代と前近代とが最も激しくせめぎ合う最後の「辺境」において、近代批判のエネルギーを集約し噴出した運動である<sup>②</sup>。

## 2. 大衆消費社会の「他者」

通常、水俣病の公式発見の日は1956年5月1日とされている。しかし、1953年頃からチッソの排水による猫、海鳥、カラス、人間などの異常死や狂死が報告される。1956年、熊本大学医学部が原因解明に着手し、1959年に因果関係が確認される。その結果を、1959年、厚生省の水俣病食中毒部会に答申するが、当時の通産大臣である池田勇人は水俣病の原因が企業の公害であると断定するのは早計であると発言した。これにより、その後の水俣病の拡大と放置の歴史がはじまる。その後、排水口が変更され、9年間にわたって工場廃水は排出され続け、不知火海全域に汚染が拡大した。

周知のように、1960年代の日本は、奇跡の高度経済成長を遂げている。その背後には、1960年からの池田内閣の所得倍増計画があり、その2つの柱が1961年の農業基本法と翌年の全国総合開発計画である。この2つの政策を背景に、(1) 公共投資の工業開発への集中、(2) 農村部小農民への保護の打ち切りと、離農して都市に集中するほかない賃金労働者の創出、(3) 農業部門の近代化＝機械化、化学農業化、市場商品化を、強力に推し進めることになる。当時のチッソの

肥料や塩化ビニールの生産は、農業の近代化と工業地域開発に連動する要であった。ここには国家レベルの政策的意思が存在する。

さらに、水俣病事件史の決定的な分岐点である1959年11月という時点は、巨視的な社会構造の変動という観点からみても大きな転換期に当たる。1965年に新潟の第二水俣病発生と、68年国による公害病認定。1968年に日本は自由主義世界第2位の「豊かな社会」を達成し、この時期の日本は、史上「もっとも成功した資本主義国」として、大衆消費社会の展開を実現した。明治以来の近代化の推進や第二次大戦後の改革を別にすれば、農村と都市の構造から家族形態にいたる日本社会の構造変動がもっとも劇的に進むのは、1960年代を中心とする高度成長期である。水俣病をはじめとする四大公害は、大衆消費社会の繁栄の、もう1つの創世記の始まりをも告げていた。こうした現代日本の創世記に、近代の精神によって攻略されるべき最後の土地の1つが、水俣であった。そこにおける患者は、大衆消費社会から取り残された「棄民」、現代社会の「他者」ともいうべき存在として登場する<sup>③</sup>。

ただ、1950年代後半では、まだ水俣には水俣病運動たるものなど存在しない。この時期は漁民による漁業補償を求めた「不知火海漁民騒動」と「見舞金契約」に決着する患者の座り込みというものがあるのみである。漁民騒動は、1959年、不知火海漁民のチッソに対する抗議行動や補償要求が実行使にまで及んで、社会的に大きな紛争となったものである。1959年7月、熊本大学の有機水銀説の発表以後、魚介類の不買運動などで生活苦に追い込まれた漁民は、チッソ工場に対して浄化装置完成までの操業中止や漁業補償を要求して交渉する。だが、工場側の拒絶によって対立が激化、二度にわたる投石騒動や工場乱入が引き起こされたが、最終的には県知事や市長などの斡旋や調停で、政治的收拾が図られている。

一方、「見舞金契約」に決着する患者の座り込みは、1959年11月に始まった。当時唯一の患者組織であった「水俣病患者家庭互助会」（以下、「互助会」）は、患者一人当たり300万円の補償をチッソに要求したが、それを拒否されると水俣工場正門前で1カ月に及ぶ座り込みに入った。当時、「互助会」の内部は調停案の受諾をめぐる

激しく対立していた。しかし、社会的に孤立無援の状況にあった患者家族にとっては、県知事らの調停以外に頼るべきあてがなく、最終的にはこれを受諾することになった。これが、1959年12月30日、「互助会」とチッソとの間で締結された最初の補償契約、見舞金契約である。この契約調印と同時に、社会的には水俣病問題は終わったものとされ、その後約10年近く闇に包まれることとなった。

1968年9月に、厚生省によって「水俣病はチッソの排水に含まれた有機水銀による公害病」と公式に認められるに至って、はじめて水俣病運動たるものが動き出すことになる。国における公害病認定が、皮肉にも水俣病運動を発生させる導火線となった。公式発見から数えても13年間、水俣病被害者たちは極貧状態におかれ、企業城下町の圧力や地域社会の差別などによって、患者として名乗り出ることすらためらってきた。遅すぎる対応であったとはいえ、政府見解によって、水俣病を「寝た子」にしてきた蓋は外された<sup>(4)</sup>。

こうした長い歴史を経て、公害病認定の年の1月に、水俣市民30余人が集まって「市民会議」が結成されたことに注目すべきだろう。水俣で「奇病」発生が騒がれ始めてから15年来、はじめてできた水俣病患者支援組織である。「チッソの城下町」といわれた水俣市で、公然とチッソに対立する市民組織ができたのは画期的なことであった。

### 3. 承認をめぐる闘争としての水俣病運動

水俣の現地で8年間「若衆宿」を主宰した吉田司が描く「水俣奇病」時代の「奇病八分」の世界がある。このエピソードは、自分が育った地域社会の中で水俣病患者がどのように見られ、扱われてきたかを物語る。地域社会から人間として尊厳を剥奪され、社会的な傷を受けた水俣病患者を、承認を求める闘争に駆り立てるものが何であったかを説明するものだ。1956年7月、水俣病患者が伝染病患者を収容する病院に隔離されたときの出来事である。

「部落には二筋の道がある。お前共によ、たあだ部落の真ん中を通つとる普通の道し

か見えんじやろ。患者ン道が見えんじやろ」。(中略)「伝染っで、恐ろしか」言て。「この水道の水は使うな」ち。「ゴミバケツは、あっちの隅の方さ入れろッ」ち。「洗濯物は、コン竿にゃ干すな。菌が伝染るッ」っち。(中略)「奇病家族ばかりで別ン場所さ寄って、七輪で炊きおったばい、飯あ」。(中略)「運の良かったなあ、あんた其」っち。「奇病なって、銭もろて」ち。「働かんづく年金の入ってくれば、俺も奇病になる如たる」ち。「ふゆじ(怠け者)が奇病なって儲け出す娑婆よ」ち<sup>(5)</sup>。

患者やその家族は、表通りを歩けば「奇病」と恐れられ、水俣病を「異」なるものとして避ける村人に嫌がられ、排斥された。地域社会の中で身の置きどころがなかった患者家族も、仕方なく家近くの海辺伝いに歩いて、山をかき分け、鉄道線路を歩いて隔離病院の看病に通った。毎日看病に通う「人目を避けた隠れ道」こそが「患者の道」である。隔離病院では朝と夕方帰る時に、全身真白くなるまで消毒される。髪や着物についた消毒薬ははたいてもなかなかとれず、奇病家族の白い刻印となって町中の人の眼を射たという。水俣の海を生活の基盤としてきた村落から水俣病患者が発生する。そして当時の患者は同じ村落の住民から、それまで生活を共にしてきた隣近所の人や親戚・家族から白い目で見られ、陰湿な排除と差別を受ける。患者が家の前を通ると戸を閉めたり、路地裏に隠れたりする。店で買い物をする、代金を直接手で受け取らずに火箸でつまんで受け取ったりする。こういった患者・家族の1人が語る、闘争に立ち上がった心境に耳を傾けてみよう。未認定患者であった坂本輝喜は、自分たちの運動が、奇病や伝染病などではなく、企業が流した排水によって引き起こされた水俣病であることを承認してほしいという、承認をめぐる闘争であることをいみじくも指摘している。

うちは親父もお袋も被害妄想がやたら強くてナ。部落の奴等はどモコモならん。許せんチ。俺はそればかり聞いて育ったわけヨ。(中略)お袋なんか、焼酎飲んじゃあ炬燵に頭ば打っつけて、泣いて叫くと。許



し難いッ、チ。それがほとんど毎晩、飯時<sup>めしとき</sup>になると始まってナ夜中の十二時ぐらいまで、続くと。定時制学級（笑）ヨ。その時間が嫌でたまらんやったっじゃがな。結局、最後までお袋に付き合うのは俺でサ。そういうのを傍らでずーっと見とってナ、俺としては思うわけヨ。毎日毎日ここまでお袋を狂わせる部落という奴がある。そいつは怪物みたいな奴だ。許せんッ、チ。お袋が飲んだくれて叫<sup>おめ</sup>くのも親父が寝とるのも皆んな部落のせいだチなってサ、あの頃は思い込んどったでナ、部落は悪いチ。（中略）それまではナ自分達の姿見てササッと路地に入ってゆくとナ、差別しやがってチ思うどがな。（中略）あのナ、訴訟派の闘いのバネを支えたのはナほんの些細なものでナ国に対する何がどうのとかナ、チッソに対する責任<sup>と</sup>を何うのとかじゃなくて（笑）、ほんの隣近所の、自分達を差別したり見殺したりした人に対してナ裁判に勝ったら、ああしてやろ、こうしてやろチ、それを支えに闘ってきたンじゃないかな。（中略）さあ裁判は終わった、部落に帰って唾を吐いて廻ってやる（笑）チ。患者の本音はそこやったじゃがナ<sup>(6)</sup>。

この章の冒頭で、社会的に傷つけられ虐げられた経験は、社会運動という表現手段が用意された場合に、抵抗行為を動機づける源泉になる可能性があるとして述べた。社会運動の基底には、当事者の承認要求が尊重されなかった経験がある。こうした経験が当の主体にとって明らかになり、社会運動への動機づけを与えるきっかけとなる可能性があるのは、一般に貶めや恥辱に対する感情レベルでの反応である。こうした状況において、個々人は情動的な緊張を強いられる。こういった緊張は、ネットワークや機会などを取り戻すことによって、社会運動という形で、能動的な行為に変換される可能性を持つ。

人格的同一性に対する暴力的な抑圧、権利の剥奪、社会的価値や尊厳の剥奪といった経験（社会的な創傷）が、社会的な抵抗や集団的な反乱といった感情と結びついた認識の源泉になる。それによって、恥辱や憤激、傷つけや尊重の喪

失をもたらすような否定的な感情レベルでの反応が、闘争への媒介になりうる。そうした感情レベルの反応は、自らが不当な理由で社会的に承認されていないという認識に結びつく。それもまた、人間が承認の経験に根本的に依存しているからに他ならない。自己との関係をうまく保つにあたって、人間は自分の属性や能力を他者とともに承認することが不可欠である。

拷問や暴行の体験が人格にもたらす後遺症を追跡する心理学の研究では、しばしば「精神的な死」が話題になる。また、奴隷制を例として、集団の手でなされる権利剥奪や社会的排除に取り組む研究で、「社会的な死」の概念が市民権を得てきたという。さらに、ある生活様式の文化的な価値が貶められることに関しては、「創傷」ということが好んで用いられる。「死」や「傷」という比喩は、肉体的な苦痛や死と同様のものが、精神にも起こることを示す。さまざまな形で尊厳を奪われることは、病気やけがが肉体に及ぼすのと同じ作用を、人間の精神的な統合に対してもたらす。こういった受苦の経験は、それ自体として能動的な行為を生み出すわけではない。それを社会運動や闘争に変換させる精神的な中間項は、恥辱や憤激、傷つけや尊重の剥奪といった否定的な感情レベルの反応ということになる。これが、尊重の欠如や不当な扱いという集団的な感情や道徳的な経験が法的承認や社会的承認の獲得を求める闘争につながるという「承認論モデル」である<sup>(7)</sup>。

先ほどの患者の語りでは、患者やその家族が地域社会から排除され、水俣病と法的に承認されたら、それを仕返ししてやりたいという感情、しかも怨念ともいえるべき激しい感情が露呈されていた。しかもそれは、本来、近代的な裁判では望みようもない質のものである。その意味で水俣病運動は、前近代的でおおよそ論理的ではないともいえる怨みを武器に挑んだ闘いであった。非合理的で直接的な生々しい感情の表出を、オートーは「聖なるもの」の両義性の、一方の本質として捉える。従来、広く神観念を言い表すために用いられている「聖なるもの」という言葉には、概念により明晰に思惟しうる合理的な要素だけでなく、本来捉え難く、言い表し難い、生々しい感情の反映で、非合理的なものが含まれている<sup>(8)</sup>。

こういった「聖なるもの」が、「訴訟派」の患者と各地の支援者によって、1970年11月に開かれた株式会社新日本チッソの株主総会で噴出することになる。チッソとの直接交渉が決裂し、地域社会のなかで孤立を深めていた患者グループが、悲しみと怒りを込めて裁判に踏み切ったものの、法廷では代理人の弁護士らのやりとりを黙って見守るしかないことに我慢できないでいた。そこで、1970年7月に「東京・水俣病を告発する会」の後藤孝典弁護士が、加害企業チッソの株主総会に乗り込んで直接、水俣病の加害責任をとらせようと、「一株運動」を提案した。現地水俣での説明会において、後藤弁護士の語るこの聞きなれぬ運動についての説明に、黙って耳を傾けていた渡辺栄蔵は、最後の一言、「株主総会で、江頭社長にものがいえますか」とたずね、「いえます」と後藤弁護士が答えると、「それならやりましょう」と受け入れる。かくして、巡礼姿に身を包み、積年の思いを胸に大阪へ向かった患者は、全国から集まった支援者とともに、株主総会の会場を御詠歌で埋め尽くすことになった。

#### 4. 支援者の運動参加の論理

では、なぜ水俣病患者でもない人が支援者として水俣病運動に連帯するのか、その論理を探っていくことにしよう。支援者の1人、藤坂信子による「ノドの熱いかたまり」という文が、『告発』の創刊号に掲載されている。

どうして訴訟派の人々を支援するかと聞かれるたびにわたしは一瞬ぐっとなまってしまう。返すべきことばがないためではなく、一度に飛び出そうとすることばの頭を抑えるために……。だが、結局、いろんな理由を言ってしまう。そして、大ていの人はその答に満足しない。一瞬ぐっとなまった時には、たしかにノドのところまで熱いかたまりが這い上がって来ているのに、それをことばにすると、自分でもがっくりするくらいに気の抜けたことばに化けるのだ。ここで仮にことばの代わりに患者の一人を立たせたら相手はたちまち諒解してしまうのではなからうか。この人たちを避けて通

ることはだれにでも出来ないはずなのだから。わたしが支援するのは実に患者がここにいるからの一言につきる。

水俣病公式発見から十数年間、水俣病患者は重度の病を抱え、極貧状態と地域社会の圧力や差別、企業や政府の無視にあえいでいた。自ら患者として名乗り出ることすらためらってきた。患者を患者として認めることを拒否され、地域社会からの抑圧と差別という「ギリギリの状況」におかれた患者という存在が、支援者を闘争に駆り立てる起動力となったことの一端を藤坂は語っている。また、ここに水俣病運動が裁判闘争として本格化する直前に、支援者によって出された手書きのビラが1枚ある。「水俣病患者の最後の自主交渉を支持しチッソ水俣工場前に坐りこみを！！」という題名で、最後に渡辺京二と小山和夫という名前と1969年4月15日の日付が記されている。

水俣病問題の核心とは何か。金もうけのために人を殺したものは、それ相応のつぐないをせねばならぬ、ただそれだけである。親兄弟殺され、いたいけなむすこ・むすめを胎児性水俣病という業病につきおとされたものたちは、そのつぐないをカタキであるチッソ資本からはっきりとうけとらねば、この世は闇である。水俣病は、「私人」としての日本生活大衆、しかも底辺の漁民共同体に対してくわえられた、「私人」としての日本独占資本の暴行である。血債はかならず返債されねばならない。これは政府・司法機関が口を出す領域ではない。被害者である水俣病漁民自身が、チッソ資本とで堂々ととりたてるべき貸し金である。水俣病患者・家族がその方針としてきた自主交渉とは、まさにこの理念をあらわすものである。

史上「もっとも成功した資本主義国」として「豊かな社会」を実現したこの時期の日本社会において、人と人との関係の基礎であり、歴史の進歩の証しだとみなされていた承認の論理が、正面から否定される事態として、水俣病事件を受け止めていたことが、このビラから明確に読み取れる。水俣病患者でもない人が運動に連帯

するきっかけは、まさにここにある。万人が万人に対して承認を行うべきだとされる近代社会において、人を人として認めることを拒否したのが水俣病事件である。したがって、水俣病運動は漁民とチッソという企業との相互承認をめぐる闘争である。また、人格と（法）人格との間の、相対の交渉によって社会的価値を相互承認し、人間存在に対して加えられた貶めや恥辱という経験が回復されるべきである。少なくとも、水俣病事件のこうした捉え方が、患者でもない人に、支援者として運動参加への動機づけを与えたのである。

ここまでの経緯から、水俣病患者の承認要求を実現するためには、政府による公害病認定という政治的、法（権利）的な承認が必要であり、また、水俣病の直接的な原因を提供した企業との間に承認を勝ち取るために、患者と連帯する支援者のネットワークが出現したことが明らかになった。法（権利）的な承認がなされ、患者を支援する組織がつけられると運動は活性化し、要求実現に向けて一気に動き出す傾向が読み取れる。しかも、地域社会や政府・企業からの長年の抑圧から、運動として表出する際は、それらの敵手に対し、仇討ちや怨念などラディカルな心情論が突出する。50年代後半までは水俣病患者が、未処理の工場廃水の排出禁止と漁業補償を要求し、抗議行動を行う。だが、こういった要求は、国レベルにおける高度成長政策の強力な推進によって却下されて運動にまで至らず、地元の県知事や市長などの斡旋や調停で不十分な形で政治的収拾を図られてしまう。患者を支援する組織もなく、孤立無援の状況にあったために、患者家族にとっては県知事らの調停以外に頼るべきあてがなく、最終的には見舞金契約を受諾せざるを得なかった。

ところが60年代後半に入ると、政府の公害病認定と、地元水俣市における患者の運動を支援

する組織、熊本など広範な支援ネットワークが出現する。それにより活性化した患者運動は、政府や議会ではなく、直接行動と司法に新たな機会を求めて提訴に至る。公害病認定後、チッソ社長は、患者家庭を詫びて回ったが、患者の補償要求に対しては具体案を示さず、第三者機関による補償基準設定を提案した。熊本県知事が斡旋を断った後、厚生省が補償基準提示の代わりに、「委員の人選は一任、結論には異議なく従う」という文言が入った確約書の提出を求めた。確約書の提出をめぐる「互助会」は、いわゆる「訴訟派」と「一任派」に分裂した。自主交渉を主張した患者家族は訴訟を提起する一方、残った約7割の患者家族が「一任派」となり、厚生省に確約書を提出し斡旋に応じた。これに対して、59年の見舞金契約の二の舞を踏むまいとする「訴訟派」患者及び支援者らが、厚生省の水俣病補償処理委員会の会場を占拠した。約1時間後、出動した警官隊や厚生省職員によって強制排除され、宇井純ら13人が逮捕される事態にまで至った。自らの体を張ったラディカルな行動は、予想以上の反響を呼び、砂田明らによる水俣巡礼団や各地で告発する会が相次いで結成されるきっかけともなった。

社会全体が高度成長を経て大衆消費社会を謳歌する中で、そこから取り残された異質な他者であった患者は、水俣病の公式発見から数えても十数年間、極貧と地域社会の差別、企業や政府の無視といった状態で放置されていた。自ら患者として名乗り出ることすらためらってきた状況。そういった極限的な状況のなかで、患者は自分たちを「訴訟派」、「自主交渉派」などという自己アイデンティティを名乗り、直接行動と裁判に訴え出た。こういった患者に共鳴した支援者は自分たちの存在を匿名化することによって、自ら「表現をもたぬもの＝患者」と一味同心で表出することを試みたのが、水俣病運動である<sup>9)</sup>。

(1) 長谷川宏『ヘーゲル「精神現象学」入門』講談社、1999年、125ページ

(2) 後藤孝典『沈黙と爆発——ドキュメント「水俣病事件」1873—1995』集英社、1995年、8ページ

(3) 見田宗介『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波書店、1996年、62～63ページ

(4) 池見哲司『水俣病闘争の軌跡——黒旗の下に』緑風出版、1996年、196ページ

(5) 吉田司『下下戦記』文芸春秋、1991年、9～32ページ

(6) 坂本輝喜「三十年!? 馬鹿にすんなッ」『思想の科学 水俣病の現在』78号、思想の科学社、1986年、112～114ページ

(7) アクセル・ホネット『承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法』（山本啓・直江清隆訳）、法政大学出版局、2003年、181～187ページ

(8) ルドルフ・オットー『聖なるもの』（山谷省吾訳）、岩波書店、1968年、22ページ

(9) 初期水俣病運動に関するより詳細な記述は、成元哲「初期水俣病運動における『直接性／個別性』の思想」片桐新自・丹辺彦彦編『現代社会学における歴史と批判〈下〉——近代資本制と主体性』東信堂、2003年、83～104ページ